

三尾先生の中学校文法指導書

渡 辺 義 夫

三尾砂先生がてがけられたローマ字教科書類がお宅にのこされてい
るとおききして、ぜひ拝見したいという鈴木康之さんとともに、九
月末に青葉学園にうかがいました。ローマ字関係のほかに、編集・
執筆にたずさわった中学国語教科書の教師用指導書も二十数冊いっ
しょにのこされていました。

それらのまえがきや奥付の日付けと、『青葉学園四十年誌』のな
かにある『三尾砂著作目録』とをつきあわせてみると、昭和二十七
三〇、三十二年のそれぞれの教科書（検定教科書・藤村作監修『総
合中学国語』・教育出版）の出版にあわせてそれらの一年後にださ
れたものであることがわかります。また目録にはもうのせてない三
十六年版の教科書（古田拓・三尾砂・亀井勝一郎編『標準中学国語』
全三巻・教育出版）と、その教師用指導書（総説編をふくむ全四巻）
もありました。

なかでも目をひいたのは二十七年版の教師用参考書『中学国語学
習指導の研究』全三巻です（三冊ともまえがきは二十八年一月、奥
付は二十七年十二月）。三冊とも自分の執筆された文法の部分に
インデックスがはられ、見出しのかきこみがされていますが、その
ほかに、三冊から執筆部分だけをとりはずして原冊の表紙を利用し
て一冊に同じなおしものがあります。そして表紙の題字の右肩に
は「三尾砂著」と、また題字の「中学国語……」の「国語」という

活字の上にはそだけさしかえるように「文法」と、さらに題字の
左下には「指導書」と、それぞれペン字でかきくわえられていま
す。また中扉には原稿用紙を利用した手がきの目次がはられ、対応
する全頁に一二三頁までのおし頁がかきこまれています。このま
ま印刷にまわせば一冊の単行本となる仕立てかたですが、背の部分
のいたみや、散見される赤や黒の鉛筆のかきこみなどからすると、
このあと数回にわたる改訂版執筆に際しての参照原本としてご自分
用に作られたものかともおもわれます。

以上の資料をそっくりおかりしてきてあちこちよんでいるうち
に、これらの資料はすでにひろく知られているご著書（『話言葉の
文法（言葉遺篇）』や『国語法文章論』）のかんがえを解説・補強・
追加・修正したり、検定とのぎりぎりのおりあいをつけたりしてい
るような部分があるあつて、先生の文法学説をしるうえで重
要なものではないかとおもわれました。それで、とりあえずこ
の機会に報告しておく必要があるとおもいました。

いま、わたしはこれらの資料に対応する教科書そのものの本文ま
でをみているわけではありませんが、指導書のほうの「教材の研究
・解説・研究資料・参考資料・指導上の注意」などなどの項目の説
明を、二十七年版から三十六年版までの四回の改訂・変化をたどる
かたちで通覧してみると、ごく概略的にいって、三十二年版までは
初版を基本にして部立てや諸解説などについて、いくつかの移動・
削除・追加があつても内容的にはおおきな変化はないようにおもわ
れます。それらとくらべて三十六年版は、指導要領の改訂もあつて
か、方言・句読法・段落・語構成・表現意図による諸文型などなど
がくわわり、形態論（品詞論）的なおしだしは、後退しているよう
におもいます。それでもたとえば総説編の「6、助動詞について」

のところではつぎのようにのべられていて、基本的なかんがえがつかぬかたれているさまもうかがえます。

……「だろう」を「だろう」に分けたり、「行かなかった」を「行かⅡなかつⅡた」に分けたりして助動詞をぬき出すことは意味のないことである。「だろう」は推量の助動詞でよく、「行かなかった」は「行つた」の打ち消し、または「行かない」の過去、または「行く」の打ち消し・過去といえよいことである。ふうは、用言につけたままでとり扱うべきだと思う。……とにかく現状ではこれまでの助動詞やその分類、活用などをそのまま指導する必要はない。

このかんがえは、昭和十七年『話言葉の文法（言葉遺篇）』にすでにしめされ、戦後、二十七年年度版以後の一連の教科書と指導書の執筆をへてやがて三十三年の『話しことばの文法』（法政大学出版局）の「付説」として整備された活用表をふまえているわけです。

二十七年版の指導書は、現代語文法の全体にわたってはじめて解説されたものとかんがえられます。どの項目にもじつに豊富な用例や語例をだして、必要なところでは「……の本質」から説きおこして、ページ制限もないかのごとくていねいに、あたらしいかんがえかたがのびやかに、力をこめて説明してあり、よんでいてぐいぐいひきこまれます。

手づくり合冊版につけられた手がきの「目次」をかかげ、その解説内容のほんの一部分を紹介しておきましょう。

形容詞・形容動詞	一
名詞・代名詞・数詞	七
音韻の変化	一四
動詞と助動詞	一七

副詞	二二
接続詞と感動詞	二五

形容する語（形容詞・形容動詞・

連体詞）

助詞	四五
----	----

文と語・文の成分・活用

品詞分類	六三
------	----

用言と助動詞の活用

品詞分類	七四
------	----

国字・国語問題

文の構造	七九
------	----

敬語の使い方

文の構造	九二
------	----

文語の文法

文語の文法	一〇三
-------	-----

以上のうち「文語の文法」だけは本文冒頭に赤鉛筆で「古田拡執筆」と記入があります。

○ 動詞は文の終りに述語として使われる形……が基本形である。

……形容詞と形容動詞とは、体言の上になつてその体言を修飾する形、すなわち連体形……が基本の形となる。（四頁）

○ 「(2)状態の副詞」状態をあらわすものとしては、形容詞・形容動詞の連用形がいちばんよく「状態の副詞」的な役割を果すものである。（二七頁）

○ 仮に字引に「静かな」で出すか「静かだ」で出すかといえば「静かな」の方をえらぶであろう。その方が形容動詞の特徴すなわち本質を表わしているからである。（四六頁）

○ ……活用を学習させるにはローマ字でないとカナでは、ほんとうのことがわからないことである。カナ書きの活用の説明はほとんどまちがっていることと極言することができるといふほどである。（八〇

頁)

○ ……活用という語尾変化の現象は、用言（動詞・形容詞・形容詞）と助動詞のすべて（約五千以上）に及び、それらが規則に従って変化する（例外がごく僅かあるだけ）。こういう規則的な語尾変化の体系を活用というのである。（八一頁）

ともあれ三尾先生のかんがえていらつした現代語文法の全体をみるには、ご著書や諸論文のほかに、これらの教科書や指導書もかかせない資料であることだけはたしかでしょう。三尾文法の研究は、むしろこれからのだとさえ、わたしはおもいます。

（福島大学教授）